

岡本謙次郎（大阪府岸和田市）

タイトル「歌と涙がくれたもの」

僕の出身中学は大阪岸和田の山手にある1学年2クラス編成の小規模な学校だ。僕はこの中学校で大切な人達と出会い、貴重な時間を過ごした。その中でも忘れられない出来事がある。

中学へ入学した時、僕は1組で担任はY先生という体育の男の先生、2組はT先生という国語の女の先生。幼稚な言い方をすれば、小学校を卒業して間もない僕達を暖かくそして厳しく見守ってくれる学校でのお父さん、お母さんのような存在だった。

ところが、1年生も終わりに近づいた2月、T先生が突然授業中に倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。僕たちはただ呆然とし、平静を失い、授業にならない日々が続いた。

やがて、T先生の話は口にしない事が暗黙の了解となり、何事もなかったかのように静かに毎日は過ぎた。

そして、2年生になった夏のキャンプ。このキャンプは人一人分ぐらいあるテントをかつぎ、山道をみんなで力を合わせて登り、まきをくべ、自炊するという過酷な行事だが、やり終えた時の達成感は素晴らしいものだ。

すべての作業を終え、キャンプファイヤーを囲んでいた時、Y先生が輪の中心に現れ、「天国にいるT先生にこの歌を捧げます」と言って、「涙そうそう」を歌いだした。Y先生の歌声が心に染みわたり、こぼれそうな涙を悟られまいと顔を上へ上げると、目に入ってきたのは満天の星空。閉じこめていたT先生への思いが一気に溢れ出し、ごまかしようのない涙が頬を伝った。僕はもう形振り構わず泣きながら「涙そうそう」をY先生と一緒に歌った。まわりを見るとみんな泣きながら歌っていた。歌が終わった時そこは、再び誰も口にしなかったであろうT先生を思い出させる歌声と、これから先もずっと自分達の恩師であるということを確認められた涙が融合した最高の場所となっていた。

僕は今もこれから先もずっと、この暑い季節になると、あの夏の風の匂い、キラキラ輝く星空、クシャクシャになって泣いていた友達の顔、Y先生の静かな歌声、T先生の優しかった笑顔をきっと思い出すだろう。

忘れられない夏の日の大切な思い出だ。